

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 南 和男 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

今年度の大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）について、高等学校において授業を行う立場から、1の「はじめに」では追試験「日本史A」と「日本史B」の全般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

#### 1 はじめに

今年度の日本史は、本試験で「日本史A」「日本史B」ともに前年よりも大幅に平均点が下がった。追試験については平均点が公表されていないが、本試験と比較すると、全体的に史資料の細かい読み取りは求められておらず、本試験よりも解きやすかったのではないかと思われる。受験者数に大きな違いがあるとは言え、本試験・追試験を比較したときの難易度が妥当であったかを検証するためにも、ぜひ平均点等の情報の公表を検討していただきたい。

以下、それぞれの日本史の試験について検討した結果を申し述べる。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

##### 日本史A

設問数は平成28年度から大問5題、小問32題となり、今年度も同様となっている。出題範囲は幕末期の1850年代（日米修好通商条約）から平成期の2000年代（『千と千尋の神隠し』国際映画賞受賞）まで、近現代史における出題である。なお、「日本史B」との共通問題は、大問2題で34点分となり、昨年度と同様であった。

出題形式では、正誤問題が9題（うち正文・適文選択が6題、誤文選択が3題）と昨年度より1題増加し、全体の約4分の1を占めた。また正誤の組合せは昨年度の8題から6題に減少した一方、語句の組合せは昨年度の出題なしから6題へ増加した。受験者が苦手とする形式では、年代配列及び正文の組合せは昨年度と同様の5題であった。また、昨年度6題であった人物・事項と内容の組合せであるが、今年度は文と人物の組合せが1題、文と語句の組合せが2題、地図上の位置と文の組合せが1題とやや減少した。ここ数年増加した組合せを選ぶ問題の数が安定し、受験者の戸惑いはほぼ解消されたものとする。また、正誤、正文どうし、文と語句などの各組合せを選ぶ問題の増加と多様化も落ち着き、今年度はリード文などの空所に入る語句の組合せが例年並みに戻った。

時代別では、幕末期が0題、明治期が8題、大正期が1題、昭和期が5題、戦後期が8題となっている。昨年度は2題あった幕末期のみからの出題がなくなり、その分を戦後期へと組み込んだ。一方、複数の時代にわたる時代横断の問題は、昨年度の11題から今年度は9題にやや減少した。なかでも昭和（戦前）期を含む出題は7題から3題へと減少し、昭和期・戦後期ともに時代を横断しない出題の増加など、しだいに、出題範囲が“現代”側へシフトする傾向が改めて感じられた。受験者の学習範囲も平成時代までより広げていく必要があるだろう。

分野別では、小問1題に複数の分野が混合する場合があるが、延べ数を挙げると、政治が10題、社会・経済が16題、軍事外交が11題、文化が7題、混合問題が12題出題された。昨年度は政治11

題、社会・経済23題、軍事外交8題、文化6題、混合15題であった。昨年度と違う点は、社会・経済が7題減少、軍事外交が3題増加、混合問題がやや減少したことである。これは、昨年度の第2日程でみられた受験者の学習の遅れなどへの配慮を減じて、出題分野の配分を例年並みに戻したためとも受け取れる。また混合問題の定着傾向は大きく変わらず、出来事の順序にしたがって、あるいは各分野に絞って各大問に取組めた以前の解答法とは異なり、受験者が各分野をまたいで様々な知識や思考などを用いる解答法を求めるものであり、個々の事項としてだけでなく因果関係などで紐づける学習が今後も重要となる。

史資料を活用した問題は、史料5題、地図1題、写真1題、表・統計1題と、昨年度と同程度であった。特に、従来知られていないエピソードや視点を取り入れた問題にも見られるように、高等学校の授業など基礎的な学習を前提にした出題も意識されており、新高等学校学習指導要領の新科目「歴史総合」で求められる諸資料の活用を先取りした傾向が引き続きみられる。

追試験は受験者が少なく平均点が公表されていないが、語句の組合せ問題の増加・易化もあり、全体を通して平易な問題が多くを占め、昨年にも増して受験者には取り組みやすい試験であったと言える。以下、詳細について述べていく。

第1問は、「近現代日本の鉱物資源の開発と利用」について授業発表を控えた高校生の会話がリード文となっており、3場面で構成されている。場面Aでは明治期の資源開発と足尾鉍毒事件、場面Bでは1930年代以降の資源利用、場面Cでは戦後の資源開発と公害をそれぞれ関心のあるテーマとして、互いの感想や考察を述べ合う2人の会話を組み合わせて出題している。問1は足尾鉍毒事件にまつわる語句の組合せを選ぶ問題である。教科書等の記述や高等学校の授業で、古河市兵衛は中小財閥の創業者である点にも増して、足尾銅山を買い取った政商として学ぶことが想定され、まずは足尾鉍毒問題とその背景（政府の方針など）の理解を伴って取り組みたい。また、古河より詳しく学ぶ機会が多い岩崎弥太郎の事績に照らしても正答を導ける、平易な問題である。問2は欧米からの技術導入と官営事業払下げについて正しいものの組合せを選ぶ問題で、平易な問題である。ただし組合せを選ぶ際、aの「アメリカ」及びdの「五代友厚」を誤りと判別して正答を得る可能性も高く、消去法に頼らずに解答できる出題を求めたい。問3は1930年代後半以降の資源利用に関する年代配列問題である。説明文のⅠ・Ⅱは時期を特定できる用語（第1次近衛内閣、南部仏印進駐）を含む一方、Ⅲにはミッドウェー海戦を想起させる内容に留まっているが、用語が不明でもⅡと比べて軍事行動や戦況の展開を学んで取り組みたい良問である。問4は戦時期の隣組にみる経済・生活統制についての正文選択問題である。史料は古い文体でやや苦心するだろうが、難易度としては日頃から様々な史料に触れて丁寧に読み取るなど暗記に頼らない学習を重ねて、ぜひ読み取れるようにしたい水準である。その点では、史料の件名にある「物資配給停止」を含む説明文が正答であり、ここはあえて件名を示さずに史料を読み取る力を測るような出題の工夫を求めたい。問5は高度経済成長と公害にまつわる語句と文の組合せを選ぶ問題である。池田勇人内閣のスローガンは基本的な事項である。また、公害対策基本法の文言（いわゆる調和条項）削除については、教科書の記述や高等学校の授業で扱う例は僅少と思われるが、当時の経緯がわかって興味深い。ただし、リード文中の「経済」がそのまま適文と一致しており、結果的には平易な問題となった。問6は第二次世界大戦後の日本の輸出入に関する正誤の組合せ問題で、基本的な事項を問う平易な問題である。なお、インフレ・デフレの発生など経済の基本的なしくみは、その因果関係の理解を伴って組み立てるような指導が求められている。問7は第二次世界大戦後のアジアの国々との関係について正文の組合せを選ぶ問題で、平易な問題と言える。

第2問は幕末維新期に活躍した人物についての会話をリード文とした設問で、日本史B第5問と共通の大問である。問1は幕末維新期に活躍した人物の説明文と語句を組合せる設問で、いずれ

も基本用語である。問2は幕末から明治期の貿易に関する年代配列問題で、具体的な条約・法令名のない文章なのでやや難易度が高いが、こうした出題はセンター試験でも見られたものである。文章を読んで、それが何のことを指しているのかを判断した上で前後関係も判断するという、二段階の判断が求められる設問なので、受験者にとっては自信を持って解答しづらいであろうが、日本史の理解度を問う設問として適切な形式であると考えられる。問3は「船中八策」の史料と、史料に関するメモをもとに正誤を判断する設問で、Xは政体書の内容と、その後の立憲政体樹立に向けた動きの両方の知識が求められ、やや難しいが、追試験の難易度としては妥当であろう。Yはメモの内容から判断するもので、坂本龍馬の没年もリード文中にあるため、知識がなくても解答可能である。Yの正誤判断は易しいが、史料批判について受験者に気付きを与えてくれる選択肢であった。問4は明治期の文学に関する正誤問題で、①～③では各時期の文学の内容や特徴の理解が問われており、文化史分野の学習が不十分であった者や、作者と作品名の暗記ばかりの学習をしていた者には難しかったであろうが、基本的な設問である。

第3問は大学の模擬講義のプリントと講義に参加した高校生の会話を組合せたリード文となっており、2編で構成されている。「津田梅子と周りの人々」と題されたプリントの内容、及び2人の高校生の会話に即して出題している。問1は日本初の女子留学生について正誤の組合せを問う問題で、表と史料を読み解く平易な問題である。なお、第2問のリード文にある「龍馬は1867(慶応3)年11月に暗殺」「明治維新の歴史に関わっていない」との文言は、Yの「明治初期の生まれ」を判別する上での配慮とも受け取れる。問2は津田仙(梅子の父)に関係の深い人物に関して語句の正しい組合せを問う出題で、基本的な事項を問う平易な問題である。問3は伊藤博文と朝鮮との関わりについての年代配列問題である。時期を判別する用語や説明の配分が配慮されており、日清・日朝関係の変遷を問う良問である。問4は明治期の会社についての正文選択問題であり、基本的な事項を問う問題である。ただし、教科書・副教材の記述や高等学校の授業での扱い方にバラつきが想定され、受験者により解答の可能性に差が生じる点に鑑み、誤文や語句を選ぶ問題とした方がより取り組みやすいと考える。問5は山川捨松と条約改正に関する誤文選択問題で、条約改正について基本的な事項や変遷への理解を問う良問である。問6は『職業婦人に関する調査』の調査結果をもとにした小問2題である。(1)は職業婦人の家族構成について正誤の組合せを選ぶ問題で、表の内容も読み取りやすく平易な問題と言える。(2)は調査内容について語句と文の正しい組合せを選ぶ問題で、基本的な事項を問う平易な問題である。ただし、「タイピスト」が歴史用語となりつつある近年、高等学校の授業で扱われないケースが多くなっていることも考えられるため、出題に際しての考慮も求めたい。

第4問は近現代の日本と世界の関係に関する発表をリード文とした設問で、日本史B第6問と共通の大問である。Aは二十一か条の要求を軸とする発表で、問1は二十一か条の要求に対する吉野作造の考えを史料から読み取る設問であった。吉野作造といえば民本主義というイメージだけで取り組むとかえって難しかったかも知れないが、先入観なしに史料を読むことの大切さを教えてくれる設問である。史料は読みやすく、選択肢も判断しやすいため、日本史選択者でなくても解答可能であろう。吉野作造に関する知識や二十一箇条要求に関する知識を問う要素を問題文中に含めるなど、日本史の学習成果も適切に問えるように配慮していただきたい。問2は1910～20年代の大衆文化に関する基本的な設問で易しい。Bは日独伊三国同盟を軸とする発表で、問3は外交情勢がめまぐるしく変わる1941年の出来事を発生順に配列する設問である。歴史の流れの理解を重視した学習ができているかが問われている良問である。問4は戦時中の連合国の会談が開かれた場所を問う設問で、X・Yのどちらも歴史用語を用いない文章なので、何のことかを判断した上で位置を解答しなければならない。Yは月まで覚えていなければヤルタかポツダムか判断できないと戸惑った受験

者もいたかも知れないが、ヤルタ・ポツダムがわかっているならば、c・dの位置からポツダムであると判断できる。日頃の学習から、地名が出てきたら必ず地図で確認するよう習慣づけるような指導が求められている。Cは日ソ共同宣言を軸とする発表で、問5は文章の空欄補充で、日ソ共同宣言に関する基本的な知識を問う設問である。問6は占領期の日本人の業績を選ぶ設問で、a・dともに占領期の文化の基本事項である上に、b・cは20世紀末～21世紀初頭の出来事で、時期が大きく離れているため解答しやすい。本試験の小泉純一郎内閣やこの設問の宮崎駿のように、21世紀の内容も少しずつ出題されるようになってきたが、今年度は小泉純一郎や宮崎駿に関する特段の知識がなくても解答可能なように作問されており、新型コロナウイルスの影響等で授業が思うように進められなかった学校の生徒でも取り組める内容であった。問7は第6問のまとめとなる設問で、戦前・戦後にまたがる日本の外交に関する知識が問われているが、誤文の③は経済安定九原則の内容理解を問うもので、経済分野の知識も求められている。この設問も歴史用語の誤りではなく、内容説明の誤りであり、用語暗記中心の学習への警告となる。

第5問は「近現代の女性の社会進出」について授業発表を控えた生徒のメモがリード文となっており、3編で構成されている。Aでは女優の水の江瀧子を通して昭和初期の労働争議と大衆文化、Bでは漫画家の竹宮恵子の自伝をもとに戦後期の日本と世界の出来事、Cでは近現代に活躍した女性について、それぞれまとめたメモを読む形で出題している。問1は1930年代の女性の社会進出に関連して正誤の組合せを選ぶ問題である。基本的な事項の学習を前提とするが、本問はリード文(Sさんのメモ)の読み取りのみで正答でき、平易な問題である。ただし、少女歌劇での争議は受験者にも興味深い題材と思われ、昭和恐慌以降の小作争議・労働争議の増大と女性の社会進出、大衆文化の成立についてより深く問うことができたのではないだろうか。問2は大衆文化の成立についての正文選択問題で、各選択肢の内容や対象とする時期のバランスもとれており、平易な良問である。問3は1950～1976年の日本と世界で起こった出来事についての誤文選択問題、問4は1970年前後の大学生など若者の動向やその後のマンガ業界に関して適文の組合せを選ぶ問題、問5は平塚らいてう創刊の雑誌と1993年衆院選後の内閣について語句の正しい組合せを選ぶ問題、問6は日本社会党について正文の組合せを選ぶ問題、問7は近現代の女性の社会的地位に関わる法令に関する年代配列問題で、いずれも基本的な事項を問う平易な問題である。

## 日本史B

「日本史B」について、設問数は大問6題、小問32題の構成で、今年度の本試験や昨年度の試験と同様であった。センター試験でも多かった会話文形式のリード文の他に、生徒の発表要旨やメモなど、生徒の主体的な学習活動を想定したリード文が多かった点も、本試験や昨年度の試験と同様である。設問と関係のない部分には、教科書に載らない研究動向が反映されており、リード文をすべて読んで新たな興味・関心を抱いた受験生もいたかも知れない。小問を見ると、史資料の読み取りが多いが、統計データの読み取りはなく、大部分が史料読解であった点は本試験と異なる。日本史学習における史料の重要性が伝わるが、本試験のように様々な種類の史資料から歴史について考える機会も提供してほしいと思う。ただ、史料読解問題では、史料を読む前提として日本史の知識が必要であったり、史料の内容を問う設問と日本史に関する知識を問う設問が組み合わせられて出題されたりする形式が多かったため、昨年度見られたような、日本史学習の成果が全く問われていない設問がほぼ見られない点は評価したい。

出題範囲は原始(旧石器・縄文)～現代(戦後)までであった。考古学の研究方法に関する出題があるなど、古い時代についても十分な学習が必要であった。新しい時代では1980年代までが出題され、正答ではないが21世紀の文化に関する文章も見られた。日本史Bの学習範囲内で適切な設定

であったと言える。

出題形式別では、正誤問題（正文）が7題、人物・事項の組合せが6題、正誤の組合せ、年代配列、正文の組合せが各5題、正誤問題（誤文）、語句の組合せが各2題であった。正文を選ぶ四者択一の正誤問題が多く、選択肢の誤りを検討するのに時間がかかった可能性もあろう。また、人物・事項の組合せは、実際には文章どうしの組合せや、文章と史料の組合せなどのバリエーションがあった。

時代別では、昨年までと同様に、時代横断型の出題が11題と最も多かった。各時代単独の出題は、江戸が5題、明治が4題、鎌倉が3題、平安、大正、昭和、戦後が各2題、室町が1題であった。単独でも時代横断型でも出題されなかったのが、院政、戦国、織豊であった。昨年度も第2日程では江戸時代よりも前の時代はほとんどが時代横断型の出題であったが、今年度もその傾向が見られ、異なる時代とのつながりや相違点を意識した学習が求められている。また、江戸の比重が高い印象を受ける点も昨年度の第2日程と共通するが、昨年度ほどの偏りはなく、全体としてバランスが取れていた。

分野別では、複数分野にまたがる混合問題が10題あり、昨年度よりは減少しているものの、時代だけでなく分野も横断する学習が引き続き求められている。混合問題も含めた分野ごとの出題数は、社会・経済が18題と最も多く、軍事・外交が11題、文化が8題、政治が6題であった。社会・経済が多いのは昨年度や本試験と同様であり、史資料の活用を重視するあまり、史資料問題が出題しやすい分野に出題が偏ってしまう点は引き続き改善をお願いする。特に、政治分野の出題が最少という出題バランスは、政治史学習を軸とする普通の授業を軽視し、出題頻度の高い分野に偏った受験対策に走るような風潮を生じさせかねない。高等学校で授業を行う立場としては、普通の授業で理解したことが生きやすい作問をお願いする。

次に、各設問の詳細を見ていく。

第1問は、「日本社会における戦士の歴史」をテーマとする高校生の会話をリード文とする出題で、Aは原始～近世の戦士と武器に関する内容であった。問1は弥生時代の防御機能を持つ集落と、方広寺の鐘銘に関する基本的な知識を問う設問で易しい。□イ□で問われるのが、歴史用語として暗記の対象になりやすい「方広寺」ではなく、「鐘銘の表記」であるところに、共通テストが受験者にどのような学習を求めているかがよく表れている。問2は考古学で用いられる方法に関する設問で、教科書などには記述のない内容である。第2問の間2とも共通するが、教科書の内容に関する理解だけでなく、疑問が生じたときにどう解決するか、ということが問われており、新教育課程における日本史学習のあり方を想定した出題である。問3は良源の「二十六箇条起請」の一部を用いた出題で、Xは史料の最初の2行を読めば解答可能である。Yは僧兵の強訴に関する文章で、強訴が何のために行われたのかを考えれば「朝廷に対抗」の部分で誤りと判断できるが、「僧兵」「強訴」などの用語を覚えるだけの学習をしていた者には難しかったであろう。問Bは近世～近代の「士」と「兵」に関する会話文で、問4は江戸時代の学問に関する基本的な設問である。①は人名や作品名ではない部分に誤りがあり、人名・作品名をセットで暗記するだけの文化史学習では対応できないであろう。問5は武士身分が廃止された明治時代に表れた影響と、それに関わる語句を組み合わせる問題で、Xをbと結びつけて理解していた受験者は少なかったかも知れない。一つの政策にも様々な側面があることを受験者に教えてくれる設問であった。問6は、これまでのリード文のまとめとして「徴兵告諭」を用いた設問で、a・bが史料の内容に関する文、c・dが徴兵に関する知識を問う文であった。いずれも難しい読解・知識を問うものではなく、標準的な設問である。

第2問は古代における粟と麦に関する発表要旨をリード文とする出題で、第2問のすべての設問が社会経済分野であった。古代の設問が社会経済にあまりに偏っており、改善を求めたい。Aは古

代の粟を題材とする。問1は原始から古代の穀物に関する設問で、基本的な内容である。問2は、第1問の問2のように、知識を得るだけでなく、学習で生じた疑問を自ら解決する力が問われている。Bは古代の麦を題材とし、問3は表から情報を読み取る問題である。Xは日本史の知識が全く必要とされないが、Yは壱岐の調の品目に小麦があるため、壱岐がどこか（畿内ではないこと）がわからないと正文と判断してしまうであろう。問4は古代の農業や土地所有に関する年代配列問題で、時期の近い文章はなく、ⅡとⅢの荘園の区別がつけば易しい。特に、Ⅲで「寄進」の語があることから、Ⅲは判断がしやすい文章であった。問5は第2問のまとめで、「古代」という広い時代区分での設問である。こうした時代区分での設問は第3問の問5も同様で、受験者に「〇〇時代」だけでなく、より広い時代区分で社会の特徴を捉える学習が求められている。しかし、出題が社会経済分野に偏る原因にもなっており、他分野でも広い時代区分で特徴を問うような設問が作られることを期待したい。また、この設問はこれまでのリード文（発表要旨）などを踏まえなければ解答不可能であり、リード文をしっかりと読むことを受験者に求めている点や、大問全体のまとまりを生じさせている点は評価したい。ただ、こうした点も出題分野の偏りを生じさせる原因になっており、今後改善が望まれる。

第3問は中世の法制と法慣習に関する会話文をリード文とした出題で、Aは中世の法と社会集団についての文章である。問1は御成敗式目の制定者と中世の法の種類に関する基本的な語句を問う問題であった。本所法がわからなくても、基本的な用語である惣掟を手掛かりとして、消去法により解答可能である。問2は史料読解問題で、史料1の「今世間本復の後」の意味がわかればa・bは判断可能である。史料2は「倉廩を有するの輩」を「富裕な者」と捉えるのは難しいであろうが、dの「幕府の倉」が誤りであることには気づけたであろう。また、「仰せ聞かざる」は「命じた」と「(幕府が) 施し与えた」のどちらなのかも判断できるであろう。日本史の知識は必要ないが、日本史の史料を読む訓練を重ねてきた受験者の方が、単語ではなく文の意味を拾う読み取りはしやすかったと思われる。問3は法や制度の運用に関する年代配列問題で、「綸旨」「異国堅固番役」「一条兼良」の用語で判断できる易しい問題である。Bは、中世の村の様子を伝える史料に関する会話文で、問4は史料の読解と惣に関する知識の両方が求められる問題である。特に②～④は、知識があっても史料を読まなければ判断できない内容で、史料を活用した設問として良問である。問5は中世の文化や生業に関する説明と基本的な用語を組み合わせる標準的な問題であった。

第4問は江戸時代における戦乱や災害について、高校生が疑問点を挙げたメモをもとにした設問であった。第4問を通して、学習で生じた疑問を解決するという探究的な学習活動の一例が提示されており、日本史学習のあり方の一つのモデルとも言える大問である。問1は江戸時代の戦乱の有無を問う設問で、どのような出来事があったか（あるいはなかったか）という、教科書には直接的には書かれていないことを、知識を抽象化して判断する力が求められている。これも用語の暗記だけの学習では対応できない良問である。問2は明暦の大火が発生した時の将軍が誰か迷っても、誤りの選択肢が時期的に大きく離れているため解答しやすい。問3は富士山の噴火に関する史料読解問題で、史料がやや読みにくく、史料に慣れている方が有利であったと思われる。史料1の「領主より取り替え」を「大名による立て替え」と読むのはそれほど難しくはないが、史料2は具体的な数字が複数出てきて意味を捉えきれなかった受験者もいたであろう。特に2～5行目には句点がないため、「二十四万両」が「残し置かれ」たものである、と読むのは難しかったかも知れない。普段の学習でも、このような読みにくい史料を現代語訳に頼らずに粘り強く読解していこうとする姿勢が求められる。問4は江戸時代の日本人と外国人の関係を問う正誤問題で、曖昧な知識では②も薩摩藩浪士の攘夷として正しいと判断した者もいたであろう。異なる用語を入れた誤文よりも判断の難易度は高かったであろうが、知識・理解を曖昧なままに学習を進めることに警鐘を鳴らす良問で

ある。問5は江戸時代の学術や農業に関する年代配列問題で、人名で並べ替え可能な易しい設問であった。

第5問は幕末維新期に活躍した人物についての会話文をリード文とした設問で、日本史A第2問と共通の大問である。問1は幕末維新期に活躍した人物の説明文と語句を組合せる設問で、いずれも基本用語である。問2は幕末から明治期の貿易に関する年代配列問題で、具体的な条約・法令名のない文章なのでやや難易度が高いが、こうした出題はセンター試験でも見られたものである。文章を読んで、それが何のことを指しているのかを判断した上で前後関係も判断するという、二段階の判断が求められる設問なので、受験者にとっては自信を持って解答しづらいであろうが、日本史の理解度を問う設問として適切な形式であると考えられる。問3は「船中八策」の史料と、史料に関するメモをもとに正誤を判断する設問で、Xは政体書の内容と、その後の立憲政体樹立に向けた動きの両方の知識が求められ、やや難しいが、追試験の難易度としては妥当であろう。Yはメモの内容から判断するもので、坂本龍馬の没年もリード文中にあるため、知識がなくても解答可能である。Yの正誤判断は易しいが、史料批判について受験者に気付きを与えてくれる選択肢であった。問4は明治期の文学に関する正誤問題で、①～③では各時期の文学の内容や特徴の理解が問われており、文化史分野の学習が不十分であった者や、作者と作品名の暗記ばかりの学習をしていた者には難しかったであろうが、基本的な設問である。

第6問は近現代の日本と世界の関係に関する発表をリード文とした設問で、日本史A第4問と共通の大問である。Aは二十一か条の要求を軸とする発表で、問1は二十一か条の要求に対する吉野作造の考えを史料から読み取る設問であった。吉野作造といえば民本主義というイメージだけで取り組むとかえって難しかったかも知れないが、先入観なしに史料を読むことの大切さを教えてくれる設問である。史料は読みやすく、選択肢も判断しやすいため、日本史選択者でなくても解答可能であろう。吉野作造に関する知識や二十一箇条要求に関する知識を問う要素をもんだ文中に含めるなど、日本史の学習成果も適切に問えるように配慮していただきたい。問2は1910～20年代の大衆文化に関する基本的な設問で易しい。Bは日独伊三国同盟を軸とする発表で、問3は外交情勢がめまぐるしく変わる1941年の出来事を発生順に配列する設問である。歴史の流れの理解を重視した学習ができているかが問われている良問である。問4は戦時中の連合国の会談が開かれた場所を問う設問で、X・Yのどちらも歴史用語を用いない文章なので、何のことかを判断した上で位置を解答しなければならない。Yは月まで覚えていなければヤルタかポツダムか判断できないと戸惑った受験者もいたかも知れないが、ヤルタ・ポツダムの位置がわかっているならば、c・dの位置からポツダムであると判断できる。日頃の学習から、地名が出てきたら必ず地図で確認するよう習慣づけるような指導が求められている。Cは日ソ共同宣言を軸とする発表で、問5は文章の空欄補充で、日ソ共同宣言に関する基本的な知識を問う設問である。問6は占領期の日本人の業績を選ぶ設問で、a・dともに占領期の文化の基本事項である上に、b・cは20世紀末～21世紀初頭の出来事で、時期が大きく離れているため解答しやすい。本試験の小泉純一郎内閣やこの設問の宮崎駿のように、21世紀の内容も少しずつ出題されるようになってきたが、今年度は小泉純一郎や宮崎駿に関する特段の知識がなくても解答可能なように作問されており、新型コロナウイルス感染症の影響等で授業が思うように進められなかった学校の生徒でも取り組める内容であった。問7は第6問のまとめとなる設問で、戦前・戦後にまたがる日本の外交に関する知識が問われているが、誤文の③は経済安定九原則の内容理解を問うもので、経済分野の知識も求められている。この設問も歴史用語の誤りではなく、内容説明の誤りであり、用語暗記中心の学習への警告となる。

### 3 ま と め

センター試験では、史資料があってもほとんど見ないで知識だけで解答できてしまうような設問が度々見られたが、共通テストでは、史資料、あるいはリード文まで丁寧に読み込まないと解答できない設問が多く、受験者にもこうした解答姿勢が定着してきていると思われる。史資料が多く提示されるというだけでなく、学習成果を活用した史資料の読解を求める作問を今後も願います。この質を維持して作問を続けることは大変な作業であろうが、日本史学習の方向性に大きな影響を与える試験だけに、今後も良質な作問を期待したい。

「日本史A」は、全体を通して様々な史資料を活用して思考・判断させる問題が多く、新課程も見通した作問の工夫が窺われる構成であった。史資料については、個人の自伝や論考、写真、公的機関による文書（隣組回報、社会調査）など、種類やわかりやすさに工夫や配慮が感じられ、また解答に必ず史資料の読み取りを要する問題づくりも随所で意識されている。受験者僅少のため平均点が公表されていないが、昨年に増して平易な問題が多く、比較的得点しやすい難易度であったと考える。史資料や題意のわかりやすさが今後も維持されることに加え、前年度（昨年度は第2日程）及び当該年度の本試験で出題された問題との間で難易度に大きく差異が生じないようお願いしたい。

次に「日本史B」は、本試験と比べて史資料の種類は少ないものの、出題意図をつかみやすい設問が本試験よりも多かった。また、求められている知識も追試験としては標準的なレベルであり、センター試験と似た問題も多かったことから、受験者にとっても取り組みやすかったであろう。本試験とのバランスを考慮しなければ、全体的に妥当な難易度であった。一方で、社会経済分野の出題が多いという傾向が昨年度から続いており、共通テストでは社会経済分野が出やすいという認識が定着してしまうことを危惧している。政治史を軸とした普段の授業を大切にする学習が、共通テスト対策としても最も有効であるというメッセージを受験者に伝えられる作問をお願いする。

なお、毎年のように述べていることではあるが、「日本史A」「日本史B」の科目としての性格の違いを考えれば、共通問題の出題はできるだけ避けていただきたく、引き続き検討をお願いする。